

『チェルノブイリの風が吹いてくる…
ちりが大地に降りかかる…』

親愛なる日本の皆さん！

2002年の4月26日は、よく晴れた日で暑いほどでしたが、チェルノブイリ原発4号炉の事故処理作業で亡くなった消防士たちの記念碑の台座に花が捧げられた時、突然暗雲が立ちこめ、雨が降り始めました。私達の生命を救うため自らの若い命を犠牲にした人々のために、天さえも涙を流したのです！

他の国では、チェルノブイリ16周年はただの日付にすぎません。しかし私達にとって、それは消え去らぬ痛み、決して癒える事のない傷口です。

こちらでは、「時は最良の医師」と言いますが、この場合、時は痛みにも傷口にも勝てないのです。この痛みを感じながら生きていくのは、実に辛いことです。16年が過ぎ、私達は自らの問題に自力で立ち向かわざるを得ません。

チェルノブイリ原発閉鎖の決定は、経済的・社会的な根拠からというよりは、むしろ政治的なものでした。しかし決定され、それとともに問題は逆に増えたのです。この状況の下で、生活し働くことは難しいことです。家庭を持ち、「生まれた時から既に病んでいるのでは？」と、恐れながら子どもを産むことは、苦しいことです。

「援助の手をさしのべることができない」と、自分自身に言い聞かせるのは辛いことです。無力感から、涙が目に浮かんできます。
(次ページへ続く…)



〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10
チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610
TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)
E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org (アドレスが変わりました。)

チェルノブイリは、科学技術の起こした史上最大の災害です。ですから、この結果を克服することは国際社会全体の義務です。しかし、誰が援助をし、誰が優しい心を持ち、誰が私達を理解してくれるのでしょうか？ 答はあります。それは日本人々「チェルノブイリ救援・中部」です。彼らが資金・医薬品・医療機器を集め、私達に送ってくれるのです。

26日の集会で、大谷早苗代表名の「救援・中部」運営委員会のメッセージが読み上げられました。読んだのは、まだ小さな女の子でした。彼女は緊張していました。その場のすべての人々が緊張していました。そして、私達は孤立しているのではなく、遠い日本で私達のことを気遣われ、支援が約束されているのだと読み上げられた時、人々の顔がなんと明るく輝いたことでしょう。

日本からの援助は、当地の慈善基金「チェルノブイリの人質（移住基金）」を通じて生かされています。私達は、単に手をこまねいて援助を待っているではありません。私達は「チェルノブイリの1グリヴナ」というキャンペーンを始めました。5月27日に開かれる、州議会で私達の呼びかけが支持され、キャンペーンが全国的になることが予定されています。しかし、このキャンペーンは、非常に困難な仕事になるでしょう。人々の意識に根本的な革命をもたらし、「まず祖国のこと、それから自分のことを考える」というかつての原則を、人々の心に取り戻さなければならないからです。私達の呼びかけを冷たい目で見ると、疑い深い人達はたくさんいます。しかし、



私達はあきらめません。フランスの作家、アントワーヌ・サン・テグジュペリの童話『星の王子さま』に次のような言葉があります。

「星に灯りがともされるといふことは、それが誰かに必要だということだ。」私達が星に灯りをともすのも、それがすべての人に必要だからです。しかし今日、すべての人がこれを理解してくれるわけではありません。

この機会をお借りして、支援を受けているすべての人々に代わり、深い感謝の気持ちをお伝えし、皆さんの心の広さと私達への理解に対して、深いお辞儀をさせていただきます。

皆さんが、この地上に生き、私達の運命と将来に関心を示してくださっていることに感謝します。このメッセージを読めば、私達のための皆さんの「支援プログラム」に資金を提供してくれている日本の省庁も、それを削減しないでくれるかも知れません。

深い敬意をこめて

基金代表 V.キリチャンスキー

★チェルノブイリ原発事故16周年に寄せて★

事故処理犠牲者の慰霊碑に刻まれた詩が、あの事故を鮮やかに思い起こさせます。

初めてウクライナを訪れた2年前、大地に降り注いだ放射能におびえながら、私は何故か懐かしさを感じた事が、昨日のように思い出されます。私たちがウクライナを訪れたとき、みなさんは病気とたたかいながらも、明るくユーモアを持って、いつも私たちの事を思いやってくださいました。だから、私たちが深く悲しんでいる時も、みなさんの明るさに励まされたのです。

あの原発事故は、取り返しのつかない悲劇をもたらしました。しかし、明日を生きていかなければならない子ども達のために、今私たちができることを、一つずつ一緒に成し遂げていきましょう。

そのために、救援・中部はこれからもできる限りの支援をさせていただきます。

みなさんのご健康とお幸せをお祈りします。

チェルノブイリ救援・中部 大谷早苗

いよいよ日本も廃炉の時代。老朽化と地震の危険を前に、脱原発の道を選択しよう！

敦賀1号原発が廃炉へ

日本初の商業用原子炉の廃炉が決まった。福井県敦賀市にある日本原電所有の「敦賀1号」35万Kwである。1970年の大阪万博に初送電した同原発は、日本最初の本格的な沸騰水型（BWR）商業用原子炉である。アメリカのGE社の技術を移転した。福井県には、もう一つの日本最初の原発「美浜1号」がある。同じ1970年に運転開始した。アメリカのWH社が開発した加圧水型の商業用第1号炉である。

すでに廃炉が決まっている、同じ日本原電所有の「東海1号」と核燃料サイクル機構（前の動燃）が福井県に所有する「ふげん」の2つは、何れも実験的性格の強い小型原子炉であったが、「敦賀1号」の廃炉決定によって、日本もいよいよ本格的な廃炉時代に入る事になる。もっとも、この廃炉決定は、同じ日本原電の「敦賀3号」増設と引き換えに行われるものであり、全面的には歓迎できない。原発は、電源三法交付金などによる、現地と周辺市町村の、補助金目当ての政治的取引材料となっており、今やエネルギー問題とは無関係なところで決まる。福井県は、老朽化が激しく事故などで評判の悪い「1号炉」の廃炉を、「3号炉」増設の条件としていた。福井県知事によれば「県内15基体制維持」だそうである。原発は地域の人々の心を蝕む麻薬である。

完全に消えた芦浜原発計画

うれしいニュースもある。2002年2月、断念が発表された、三重県の中部電力「芦浜原

発」は、このほど、国の「重要電源指定地域」から解除された。これで、「芦浜原発」の可能性は消えた。1963年の計画発表から39年、予定地の芦浜を抱える南島町の人々が、親子3代にわたって反対を続けた結果である。芦浜の漁師たちの懸念は、チェルノブイリ事故で現実となった。チェルノブイリ事故を教訓に、スウェーデンやオーストリア・ベルギー・ドイツなど、ヨーロッパの国々は、脱原発の道に記念すべき第1歩を踏み出した。代替エネルギー開発に本腰を入れるドイツでは、今では大型原発3基分に相当する300万Kwが風力発電である。

世界のエネルギー産業は、原子力から水素エネルギーの開発へと、急テンポで転換が進んでいる。21世紀は脱原子力の時代である。

政治に脱原発と新エネルギー開発の風を

この間、日本国内各地では、原発関連で住民投票が行われ、新潟県巻町・刈羽村・三重県海山町など、何れも「反原発住民の3連勝」で終わった。国民の意識は、すでに原発から離れている。日本で最も遅れているのは、政治家と電力会社である。政治家は既成事実にも弱く、不勉強の上に、資金源である原子力産業界と、労働組合の鼻息を伺って、動こうとしない。電力会社は、地域独占の上にあぐらをかいて、新しい時代の到来を拒否している。この体制を改革しない限り、日本に脱原発はやってこない。

東海地震と脱原発は、今、競争の真っただ中である。どちらが早いのか。

（河田）

お待ちかね！ チェルQデーです。

●日時 6月15日(土) 13時30分～16時30分

●会場 愛知県勤労会館 第2会議室

JR中央線または地下鉄鶴舞線「鶴舞駅」下車 徒歩5分

(鶴舞公園／陸上競技場南側)

今年は、以下のプログラムを用意しました。なお、現地の状況や、この1年の救援活動の様子を撮した写真の展示も行います。

第1部 特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部 通常総会

(13時30分～14時15分)

議 題 2001年度の事業報告と決算報告

2002年度の事業計画案と予算案 他

第2部 ウクライナ講座(14時25分～15時30分)

① 現地カウンターパートの紹介(山盛三千枝)

② 講演「汚染データから見る最新のチェルノブイリ」

講師 河田昌東(救援・中部 事務局長)

第3部 交流会(15時45分～16時30分)

お茶を飲みながらのフリーディスカッション

昨年からのアイデアで、総会の人数確保対策として始めたイベント「チェルQデー」。

今年は、総会后「ウクライナ講座」を開催します。テーマを2つ用意しました。

1つめは事務局員山盛さんが、カウンターパート「ホステージ基金(移住基金)」や「ジトミル消防署」の面々の素顔を私達に語ってくれます。「ポーシェ」だけでは知りえない“本当の彼ら”に迫るチャンスです。裏話続出、間違いなし！

そして2つめは、当「ポーシェ」の6～7ページにも一部を紹介していますが、河田昌東氏に、超レアな「汚染データ分析(本邦初公開)」を報告していただきます。そこから見えてくる「ウクライナの未来」をいっしょに考えましょう。

最後に、恒例の懇親会を行います。正会員でなくても、総会を含めすべてのプログラムに参加できます。たくさんの方のお越しをお待ちしております。

外務省2001年度完了報告&2002年度申請 無事終了!

事務所を終了する17時、普段の仕事を終えた事務局メンバーは、休憩する暇もなく完了報告書作成にとりかかる。ウクライナ語とロシア語の区別のつかない、(区別がついても解読不可能な)領収書の束と、悪戦苦闘の時間が続く。時は、花粉症もピークの3月半ば…。

今回、初めてODA補助金の仕事と「お近づき」になりました。この「完了報告書」とは、平成13年度の交付金3,420,000円が、申請どおりかつ正当に使われたことを、あの…「外務省」に報告するためのもので、「報告書の内容いかんでは減額もあり得る」という、緊張感の伴う仕事でした。そして、桜もすっかり散り終えた4月半ば、「満額承認」という喜ばしい報告を受けました。

いま、新緑が目まぶしい5月となり、今年度の申請におおわらわ。今年度も昨年同様、ナロジチ病院の医薬品・粉ミルク・障害者協会支援・物資輸送費、そして引き続き行う「栄養調査のための専門家派遣」が交付金申請対象です。栄養調査の今年のテーマは、「新生児の異常の原因を、母子の健康管理・栄養学的見地からさぐる」です。暑いあつ〜い夏が過ぎ去った頃、今年度の補助金が決定します。(市原)

ミニバザーとクリスマスカード作り

日付：6月16日(日)午前11時～午後3時

場所：一宮スポーツ文化センター 1F

きらっとフェスタ会場内

バザー

手作り小物
ハーブクラフト
ハーブティー
ハーブの苗など

ハーブティーコーナーも
あります!

クリスマスカードを

一緒に作りましょう!

「使用済み切手」も、
引き続き、ご協力をお
願います。

チェルノブイリ救援・一宮

つぼみを守る会

中島しぐれ

問い合わせ

〒491-0057

一宮市今伊勢町宮後字西茶原 62-5

TEL 0586 (46) 0263

現地情報で見るチェルノブイリ後遺症

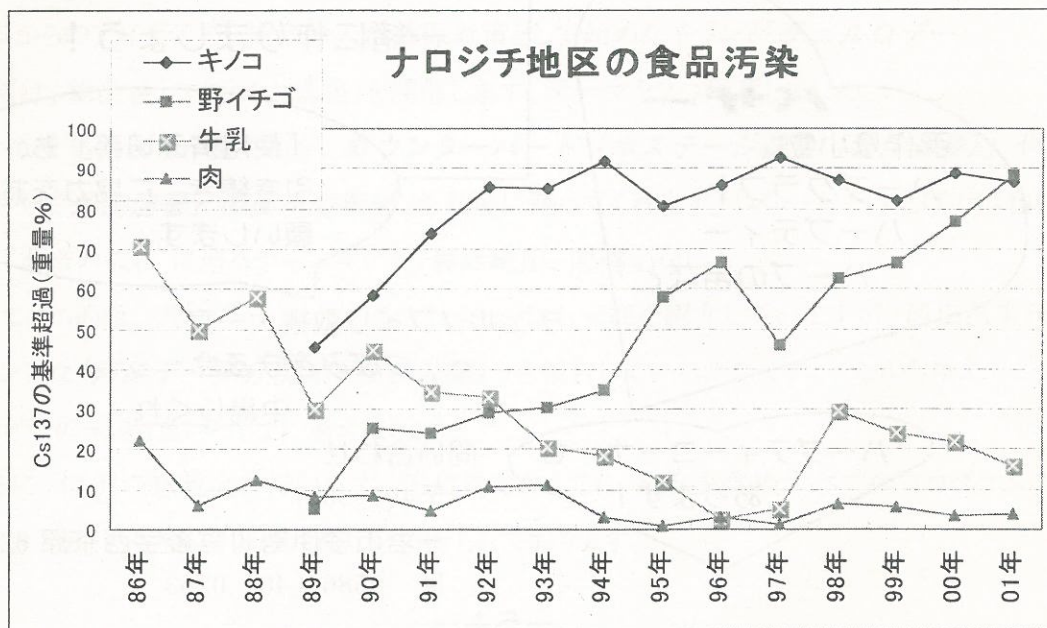
チェルノブイリ事故から、丸 16 年が経過した。人々の意識からも、次第に薄らいでいく。しかし、事故処理作業や汚染地域の人々にとって、事故は今も継続中である。代表団が持ち帰ったデータで、事故の後遺症を検証する。

ナロジチ村はいずれ消える？

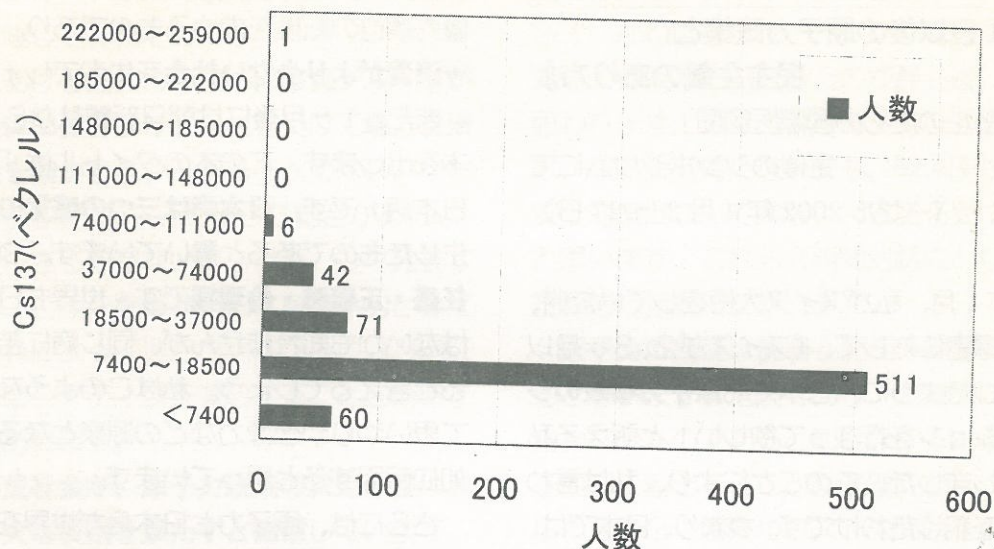
私達が支援しているウクライナのジトーミル州ナロジチ地域は、チェルノブイリから西に 70Km にある。事故の際には、放射能が通常の 30 万倍にも上昇し、この地域は「移住対象地域」となった。当初行われた移住政策も、ソ連が崩壊し資金源が枯渇するとともに、途中で止まってしまった。現在ここに 10,578 名が住んでいる。一昨年、政府はこの地域を「格上げ」(?)し、人が居住してもかまわないことになった。しかし、危険が去ったわけではない。人々は、相変わらず汚染したものを食べ、汚染した環境の中で生き続けなければならない。

汚染の最も典型的なのはキノコ類で、下図の通り、一貫して基準を 90% 近く超え続けている。(前号でも報告したが、あえて再掲する。) 基準は、Kg 当り 500 ベクレル。日本は 370 ベクレルである。野イチゴは、年々汚染が増加しており、2001 年はキノコ並みの 88.2% が基準超過となった。これは、過去の汚染した木の葉が腐葉土となって、再び植物に吸収され始めたからである。森の土壌中の放射能は、地表が Kg 当り約 8 千ベクレル、地表から 15 センチで 15 万ベクレルもある。森の木を焚き木にすれば、放射能の灰で被曝する。

こうした生活の結果、住民の体内放射能の蓄積は深刻である。(次頁)

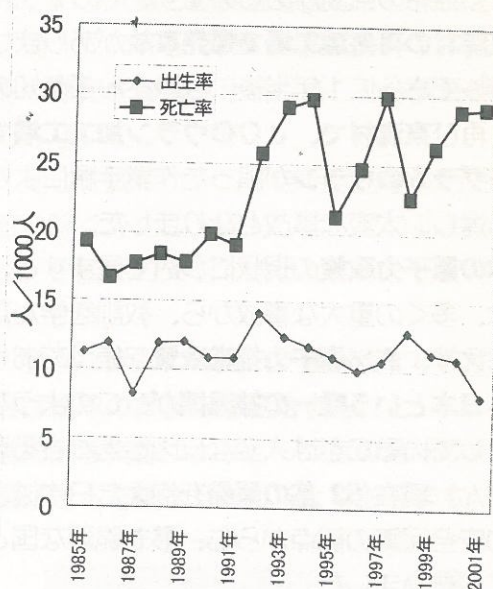


ナロジチ地区住民の体内放射能(2001年)



上の図は、ナロジチ病院で測定したデータである。2001年の初め6ヶ月間に測定した、住民691名の体内放射能測定値(Csセシウム137)であり、この中には、14歳以下の子ども63名も含まれる。現在の日本人の平均値が約20ベクレルであることを考えると、上記のデータが如何に恐ろしいか分る。最大22万ベクレルを超えた人もいた。これは過去のデータではない、現在の体内放射能である。右の図はナロジチ地区の出生率と死亡率の推移の比較である。最近の出生率の低下傾向に加えて、死亡率の顕著な増加が明らかである。シトーミル州の北部40%は汚染しているが、州平均の死亡率はこの期間ほぼ12~15人/1000人で推移しており、ナロジチ地区の死亡率の高さは跳び抜けて高い。勿論、この全てが放射能によるものではなく、移住などによる人口構成の変化など社会的要因も考えられる。しかし、ナロジチ地区の人口構成を見ると、事故

ナロジチ地区住民の出生率と死亡率



当時の86年には子どもの割合が8%程度だったが、1997年には12%を超えており、死亡率増加が高齢化による自然死亡率増加とは考えられない。データは次の機会にするが、原因は病気の増加である。
(河田昌東)

東海学園大学教授 前駐スイス大使：村田光平氏の素晴らしいメッセージを、インターネット上で見つけたので紹介します。

『9月11日以後の原子力政策と民主主義のあり方』

「核戦争防止のための国際医師団」

主催のシンポジウムにて

(スイス・バーゼル 2002年4月26～27日)

1997年1月、私がスイス大使をしていた時、日本の指導者に対して、「スイスが2、3ヶ月以前に実施したように、日本でも**原子力事故のシミュレーション**を行なって欲しい」と訴える私信を発送しました。このことにより、私は言わばタブーを犯したわけです。つまり、日本では、原子力の危険性を述べるということは、反原発の立場をほのめかすこととなり、厄介な問題や不利な結果を招くので避けなければならないと思わせる独特の風潮があるのです。その2ヶ月後、**東海村の再処理工場で爆発事故**がありました。そしてさらに1年半後には皆さんご存知の通り、再び**東海村で、JCOウラン加工工場**で**1ミリグラムのウラン**が誤った作業手順により臨界に達し、大変な事故となりました。

日本の原子力政策の現状について見ますと、日本は、多くの重大な事故から、教訓を学んだとは言えず、依然**原子力推進政策**を続けております。**日本という唯一の被曝国**が、このようなことをしていることは大変な皮肉と言わざるを得ません。**現在 53 基の原発**を抱えた日本は、国家の安全保障の観点からも、最も脆弱な国となってしまいました。

一年前に私は著書を出版しました。本のタイトルは「**新しい文明の提唱—未来の世代に捧げる**」です。核の軍事利用の犠牲国である日本が、今度は核の民事利用の犠牲国になる道を進んでいると指摘しました。「**日本病**」という言葉がこの本で初めて使い、このような特殊な現象を説明しました。

私は倫理と連帯に基づき、**環境及び未来の世代的利益を尊重する新しい文明**を提唱しています。このような新しい文明は、物質から精神の優先順位の転換を求めるものであり、**エネルギー消費がより少ない社会**を生むでしょう。

また、1ヶ月後には朝日新聞社から2冊目の本を出します。この本のタイトルは「**原子力と日本病**」です。**日本病は三つの感覚の欠如**から生じたものであると書いています。つまり、**責任感・正義感・倫理観**です。世界も日本ほどではないかも知れませんが、同じ病に苦しんでいると言えるでしょう。私はこのような現象は全て思いやりや想像力などの源泉となる感性の欠如に起因すると思っています。

さらには、原子力と日本病が世界を破滅することもあり得ると論じています。特に私は二つの具体例を挙げました。一つは国の公的機関により**マグニチュード8クラスの地震の発生が予測されている震源域のど真ん中に建設されている4基の浜岡原発**です。もう一つは、**青森県六ヶ所村の再処理工場**です。この工場では、広島原爆の実に100万発分もの放射能が蓄積される予定です。

もし最悪の事態が生じれば、先の戦争での被害を遥かに上回ることになるでしょう。しかしながら日本の社会においては、この問題を報道することに関して暗黙裡に課せられた自主規制のために、かくも恐ろしい危険に対する認識は全くありません。風潮は、先の戦争が始まる以前の日本を彷彿させるものであります。本の中で、私は**浜岡原発の即刻閉鎖**を求めています。現在、この問題に関して世論を目覚めさせるため、影響力のある人々と連名の声明を用意しています。

ここ数年、私は指導者に原子力の危険を警告するために、あらゆる機会をとらえ個人的な手紙を送り続けてきました。しかし、その成果には失望を禁じ得ず、私は**原子力政策の転換を図るには市民社会の関与が不可欠**であるとの結論

に達しました。幸いに、私は最近いくつかの市民グループから協力の申し出を受けました。これら市民グループが浜岡原発に関して声明を出すよう示唆してくれたのです。

現状における最良の方策は、**市民グループが地方自治体に働きかけ、これを受けて地方自治体が国会を動かす**ようにすることではないかと思っています。政府もこのような動きがあれば、影響を受けざるを得ないでしょう。近々発表する声明は、世論を動員することを目的としており、これによって地方自治体が正しい方向に向けてイニシアティブを開始することを期待するものであります。

私は**市民社会が、原子力政策の決定過程において不可欠な役割を果たすと確信**しています。このことは人間社会の決定要因に変化が見られ出したことを反映しています。つまり、**知性から感性へ、権力から哲学へ、技術から直感へ、専門家から市民への重要性の転換**です。優れた直感と哲学の感覚を持った市民なら専門家に立ち向かい、1,500kmに及ぶ配管と40万ヶ所に及ぶ溶接部を有する再処理工場の長期的な安全を確保することは全く不可能であると断言できるはずで

最後に、国際社会が取り組むべき3つの課題につき、述べたいと思います。一つ目は原子力エネルギーに関する基本的な事実、即ち**安全確保の必要な全てのコストを計算に入れる**価格の内部化が実施されれば、**原子力利用は商業的に成り立たない**ということを周知させることです。そのような原子力に依存し、大変な危険を犯す理由はどこにもないはずで

原発の輸出などは言語道断です。

二つ目は既存の**原発に対する国際的な管理強化の必要性**です。国家主権は、必要な調査を受けることを拒否する口実にはもはやなり得ません。破局的な事故が起きれば、それは一国にとどまらず、世界を破滅することにもなり得るからです。

三つ目の点は**文明間の対話**に関することです。原子力の問題はエネルギー消費を減らすような我々の生活スタイルの変化を視野に入れて対処していかなばなりません。この問題は文明間の対話の枠組みの中で扱うのが最も適していると思われます。原子力事故の深刻な影響に鑑みれば、核施設を持たない国も、関係国が取るべき安全対策について関与し、協議を受けるべきだと思います。これも文明間対話にとり、大変時宜を得た話題だと思います。

原子力の問題は倫理と責任の問題に集約されると思います。危険であり、商業的にも採算に合わないものであると知りながら、原子力施設を他国に輸出することは倫理にかなっていないでしょうか？ 危険やコストの問題を承知の上で、政策決定者がこのような施設を輸入する側に加担することは倫理的でしょうか？

核廃棄物の処分の仕方でも知らずに、また何十万という人員の動員を必要とする事故を鎮圧する備えもなくして、**36カ国において430基以上の原発を稼働させ続けることは責任感の欠如**ではないでしょうか？

そして誰にとっても自明な悲惨な破局の種を取り除くために、何もしていないということは、正義感の欠如であると断じざるを得ないと思います。

我々には**二つの選択が残されています**。一つ目は地球の非核化を開始すること、二つ目は、破局的な災害により、**一つ目の地球の非核化を選ばざるを得なくなる**ことであります。

(インターネットから転載・一部割愛)



名古屋港からオデッサ港へ！！

いよいよ、船便荷物の準備が始まりました。

5月18日、榎本さん（知多市在住）宅の敷地に預けてあった物資（各医療施設や星美学園などから寄付された、医療機器・医療消耗品・病院仕様のベッド・中古自転車・車椅子など）の整備を行ないました。天候不順のため、作業がはかどるか心配でしたが、日頃の心掛け？で、爽やかな五月晴になりました。



午前中の手際の良い作業によって、税関申告書作成のため、ダンボール 33 箱は種類と数、総重量・サイズを測られ、それぞれ番号が付けられ、整然と室内に並びました。午後からは、大物のベッドと中古自転車の清掃整備を行ないました。日本の医療施設で廃棄処分になったベッドの中には、まだ充分使用できるものがあります。前のウクライナ訪問時に、「このようなベッドを整備して送ったら、利用できないでしょうか？」と提案しました。病院の地下倉庫にあったため、ほこりで汚れていましたが、拭き取ったところ見違えるほどきれいになりました。代表団の視察によるとほとんどが木製で、シングルサイズよりも小さ目のものです。キャスター付スチールベッドなどウクライナでは稀少価値ですから、地方の病院に贈られたらベッド柵などは使い方が分からず、花壇の柵に使われていたりし



て…などと、ふと頭をよぎりました。中古自転車 7 台は、伊那の原さんが 1 日ばかりで修理整備を行ないました。神経も体力も使う大変な作業でしたが、笑いもありの楽しい一日でした。

最後に、お世話になった、榎本さんのお母様の心尽くし、おいしい五目御飯をご馳走さま！

これからもお世話になります。

「アレクセイと泉」を観て（橋本京子）

アレクセイを見て、あっ！と思った。しゃべりかた、歩きかた…彼は、軽いが障害がある。小児麻痺の後遺症だろう。高濃度に汚染された強制移住地域の村々に、今でも住み続けているのは、ベラルーシでもウクライナでもそのほとんどが老人たちだ。村で「たった一人の若者」アレクセイ 34 歳、事故当時は 20 歳だ。障害があることだけが父母といっしょに残った理由ではないにしても、初め、私はなんともやるせない思いがした。しかし映画が進むにつれて、この若者に引き付けられていった。水汲み・薪割り・コンバインの運転・木の切りだしなどの力仕事を、老人たちに代わり、一手に引き受けて黙々と働くアレクセイ。カエルに「姫君」と話しかけ、雪原で犬とたわむれ、馬と兄弟のように駆けるアレクセイ。アレクセイの純な魂は、汚染されていない泉そのものようだ。「泉の水が僕の中に流れ、僕を引きとめている。」土を耕し、家畜を飼い、パンを焼く。糸を紡いで、機を織り、刺繍をする。ダンスに興じ、ウォッカに酔う。人間の根源的な生の営みが、美しい自然を背景に淡々と描かれる。するとつい、この穏やかな暮らしが永遠に続くかのような錯覚に陥る。しかし男たちは、井戸の修理がこれで最後になるだろうと思い、女たちの歌はみな、もの悲しい。老人たちが去ったあと、アレクセイは、そして泉は……。

NPO法人チェルノブイリ救援・中部の2001年度収支報告書

(2001.4.1~2002.3.31)

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
救援寄付金	5,680,186	事業費	17,700,776
(内訳) 個人(674件)	4,576,447	(内訳) 医療関係支援事業(医療機器提供)	3,411,258
団体(28件)	1,103,739	医療関係支援事業(医薬品提供)	3,400,000
運営費関連寄付金	712,900	保健事業費	4,499,999
(内訳) 個人(130件)	689,900	被災者団体等支援事業費	1,961,813
団体(3件)	23,000	特別事業費	0
国際ボランティア貯金交付金	4,148,000	奨学金事業費	1,118,568
外務省ODA補助金	3,899,732	現地派遣事業費	971,516
民間助成金	4,100,000	現地パートナー支援事業費	0
物品売上等	114,850	業務委託費	620,375
預金利子等	9,386	駐在員費	246,150
現金過剰	8,315	輸送費	316,960
未払金清算差額	103,340	文通・クリスマスカード事業費	41,150
		国内事業費(機関紙発行)	1,112,987
		管理費	3,700,745
		(内訳) 役員報酬	660,000
		人件費	776,464
		通信費	677,997
		印刷製本費	80,348
		旅費交通費	383,281
		会議費	30,342
		支払利息	22
		消耗什器備品費	251,940
		消耗品費	83,564
		機器賃借料	0
		修繕費	0
		事務所費	546,282
		支払手数料	92,435
		広告宣伝費	54,324
		諸謝金	7,068
		団体会費	30,000
		租税公課	0
		為替差損・通貨両替手数料	12,814
		雑費	3,859
		使途不明金	10,005
		当期支払い合計	21,401,521
		当期未払い金合計	217,218
当期収入合計	18,776,709	当期収支差額	-2,842,030
前期繰越	18,292,175	次期繰越収支差額	15,450,145
収入総額	37,068,884	支出総額	37,068,884

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正當に処理されていることを証明します。

2002年4月13日 監査人 南 和也

未払い金内訳 医療機器提供事業(車椅子購入代金) 213,900円 4月8日清算済み
 消耗品費(コピー用紙購入代金) 3,318円 4月5日清算済み

※後期に現金過剰(8,315円)・現金不足(10,000円)がありました。現金チェックの頻度を上げることで、今後の防止策といたします。

事務局だより

チェル救の事務所は、築十一年という古い木造アパートで、私の学生時代の下宿のようだ。夏になれば窓を開け網戸にし、蚊取り線香をたいて入り口のドアを開け、風を通す。窓の外の隣の庭の緑を眺め、ほっと一息。壊れて「首」が安定しない扇風機だが、これで暑さを凌ぐ。そんなふうにしてこの10年、事務所での夏を過ごしてきた。…が、なんと今年の夏、クーラーが入ることになった。パソコンのコンディションを保つ為の策という。精密な機器は、暑さ寒さに弱いとは。砂漠じゃあるまいし、せめて日本の夏ぐらいの気温に耐えて欲しいが、環境に適應する能力がまだ無いらしい。自宅にクーラーの無い私にとっては、これはちょっと一大事。快適さと引き換えに、神経痛だ夏風邪だというおまけは頂きたくない。かくして、あの懐かしい夏とはさようなら??? (山盛)

アネクドートなひととき

先生：「皆さん、ロシア語の名詞には、男性・女性・中性という性の区別があります。

では、『タマゴ』の性は何かしら？」

生徒：「『タマゴ』は、何でもありません。」

先生：「どうして？」

生徒：「『タマゴ』は、かえてみないと分からないからです。」

(これは、ソ連時代の「健全」なもの)

編集後記

- ☆ 30年ぶりの学生生活、毎日が楽しく忙しい。滋賀県からの遠距離ボランティアも忙しい。それにしても、やりかけのウクライナ語、ほったらかしのロシア語に加え、一からの中国語にやり直しの英語と、ああ…この先どうなることやら…。 (京)
- ☆ 「今いらないけれど、いつか使うかも知れないし…。」「皆が持ってる。私だってほしい…。」人のものを羨むのは、幼稚だと思っていた。他国の脅威に備え、核を保有していたいと言う。互いに友好を喜び、握手をし、国に戻ったら有事に備える。変！ (美)
- ☆ 「ドゥルーシヴァ」…（「友好の家」の看板に）、「ナジェーシダ」…（「希望丸」の船体に）。ウクライナの仲間達から教えられた美しい言葉が、何度も何度もテレビに写し出される。こんな形で復習することになろうとは…。とほほ。 (J)
- ☆ 週に2～3個プレーンヨーグルトを買っている。それについてくる砂糖がたまってしまって困っている。どなたか砂糖の大量消費方法を教えてください。それともいっそ蟻の巣に流し込んでしまおうか。蟻の歓喜の顔が目に見え…。 (佳)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473